

李重光

敬上
ルイベーンポニユー
日本朋友



敬^グ上^ン日^シ本^ア朋^ン友^ル
友^イ

敬上日本朋友

一九七二年二月一五日第一刷発行

著者／李重光

定価／六五〇円

発行／株式会社白鳳社

東京都千代田区神田神保町一―20

振替・東京九二二四一

電話・東京(03)二九一―七五七一

はじめに

「ボーイ、ちょっと、来^{ライ}来^{ライ}！」聞くだに、ほほえましい国際語です。これは約三十年のむかし、そのころ中国に在留していた日本人の家庭、特に婦人の口から耳にとめた言葉です。これはまたなんと気楽な言葉の使い方よと思って、その後は、機会あるごとに気をつけていたところ、こういう気楽な使い方が、意外に広く行なわれており、そこ一軒や二軒のことではないことを知ったのでした。

はじめに

英、日、中、三国語ミックスのこの言葉が、この言葉を受ける被使用人である当時のわが中国人に、心に少しも引つかかるところなく受け入れられてもいたのです。ひっくり返して言うなら、受け入れさせていた側が、日本人だったのです。まるで、身をしめつけていた服も靴下も脱ぎす

てて、寝台にでも寝転がったときの解放感のような、束縛も何もない語感を覚えさせるものがあります。

復交がいよいよ進展して行くにつれ、チラと脳裏を掠め過ぎたのが、過去のこの思い出でした。侵略もわれ関せず、殺戮もわれ与^よからずの、ごく普通の生活を営む善良な在留日本人でも、この気楽さは享受し得ていたのです。中日復交推進の陰には、政・経・学界有力者たちの力も大いにあったことですが、それをさらに背後から声援した国民の熱意の中には、この過去の気楽さに対する郷愁のようなものが、働いていたのではないかと、思ってみたりもします。

本当に善良な人たちでした。そしてまた、善良な被使用人たちでした。ハンマーを持って来いと言いつけたのに、散々じりじりする思いで待たせた末に、帰って来て差し出したのが蛙であるのを見て、思わずどやしつめたという話も聞いたことがあります。中国では、「ハンマー」と耳に聞いただけでは、前にそういう言いつかりの経験がない場合、蛙の「蛤蟆^{かま}」と区別がつきにくいでしょう。おかしい言いつけだとは思っても、命令とあれば、言われたとおり実行にかかります。握りこぶしではあったけれど、なんだか跳ぶような手まねで言いつけられた気がして、野原の水溜まりの縁を、逃げる蛙と追う人間、ともにピョンピョンとはねまわって、ようやく捕まえて帰ったのに、結果はあわれこの始末です。

子供でもない、いいとしをしたその失策者は、わけを知って、ただしよんぼりとするばかり、とは、両者ともに、なんと善良な状況だったでしょう。どやしつけたほうを、横暴だ、圧制だと、そうすべてを政治めかして、理論的、尖鋭的に解釈する必要はありません。このようなことは、家庭でも友人間でも「よくある善良なまちがい」であるからです。善良同士の「まちがい」に、理論を持ち込んで武装させるのは、無用のことです。不当でさえあるのです。それは、ごく行き当たりばったりから来る曲折であり行事であって、もともと、深い根とてはないのです。

しかし、根が深くないということこのことは、とりもなおさずそのまま、大事な理解の面でも行き当たりばったりに過ごされていた、とも言えましょう。怨みもとどめぬ代わり、理解も残さない。あるものは、気楽に過ごし得た天地としての思い出の中国、というのが、政治・軍事に携わらぬ善良な、当時を知る日本の人の心証ではなかったかと思えます。

こうは言うものの、他面また、一般居留民で非常に高飛車な人たちも、数多くあったことは事実です。こういう人たちは、その高飛車通用の時代をなつかしむところがあるかもしれません。しかし時代はまったく変わったのです。もはやわが中国人は、過去のあの忍従は繰り返さないでしようし、日本の人たちもまた、ただ善良なだけからの禍の種を蒔くことは避けねばなりませんし、高飛車に至っては、もちろん論外であることは、今日ではすでに、あまねく知られつくして

いることです。

それならば、いざ新時代の両国間の交際に、日本の人々はいったい、どういう心構えで対処して行けばよろしいか。中国との往来という点から言うなら、従来日本の人たちは、世界中で最も多数の人々が、最も密接にそれをして来たにかかわらず、今もって中国のこととなると、戸惑い、気おくれ、そしてある種の恐れをさえ抱えているように見えるのは、なぜでしょう。

わたしはこれを、過去の善良と高飛車以外、根というものをおろすことを怠って、安然としていたことによる必然とさえ思います。

出版社の出版目録を見れば、中国に関する良書は、実に数多く出版されています。そうでありながらなおかつ、この中国に対する知識の欠如は、良書必ずしも実用ならずの感を抱かせます。むつかしい理論を述べることも、もとより必要ですが、時に臨んで尻ごみすることのない心構えをつくると言いますか、練成すると言いますか、そういった面の日常のお役にたつ、平易な碎いた本が一層必要ではないかと、こういう見地から、幸い、白凰社社長高橋謙氏の御理解と御援助を得て、あえて卑見を一本に纏めて、日本の方々の御参考に供してみることにいたしました。目下の三角形のいずれにも属さぬわたしは、書中の憎まれ口も、まったく不偏不党で書いたつもりです。非才であることは、どなたからの御批判をまつまでもなく、自分自身、よく心得ておりま

すが、さらに加えて江湖の御批判を賜わりますならば、よりますます自励の資として、ありがとうございます。

一九七二年十月一日

李 重 光

出版社の御依頼によって、本書の中国語の部分に読み方のふりがなを付けましたが、日本のかなで外国語の発音を表わすことは、元来至難のことです。用法上数々のお約束を必要とすることになります。本書の性質で、それほど骨を折って読んでいただくものと思いますので、奇異とお感じかと思われる用法のお約束にとどめて、他はかなのとおりにお読みになってよろしいのではないかと思います。

各字のふりがなの第一字が「ジ」と来るのは捲舌音けんぜつおん（chの発声）。

同じく第一字が「ル」「レ」と来るのは捲舌音（jの発声）。

同じく第二字が「ア」「オ」と来るのも捲舌音（ヤ・ヨと区別）。

同じく韻尾が「ー」と来るのも捲舌音（イと区別）。

「シャ」「チャ」とあるのは「シャ」「チャ」ではありません。

目次

はじめに	一
同文同種のすきま	二
目にひっかった日本人のあれこれ	四
中国人のもつ特徴	六
中国人の質素・忍耐と人生観のなりたち	八
中国人の世界観・国家観	一九
中国人の物の考え方	二三
機警には素養が必要	二四
面子は難解か	二七
過去は過去として新しい親善へ	二七
自戒とむすび	二九

敬上日本朋友

同文同種のすきま

いよいよ復交となりました。まだ少しは、曲折もあるにはあるでしょうが、もうここまで来れば大丈夫、なんといってもお互い、いわゆる同文同種の仲ですからね。少々ぐらい先行している国だって、「嘿、嘿、走開、走開」(エエイ、のいた、のいた)でしょう。それでも、日本には、少し弱い立場もありますね。よその多くの国とちがい、日本は喧嘩して永年わかれたままなのです。空白で気心がよくわからなくなっていますから、「復交には三原則がある」などと、周さん、息張ったことを言いたくもなかったでしょう。

同文同種と言っても、それだけに頼ってはいては、それなら親子は、同文同種ではないのか、兄弟は、同文同種ではないのか。同文同種どころか、同文同骨肉です。その、まさしい親子・兄弟

でさえ、まちがいを起こしたあとでは、ちゃんと、物のけじめをつけるのが、常道ではありませんか。もつとも、そうときまれば、こちらもちちらで、こちらの原則というのを立てて、むこうの原則とこちらの原則をぶっつけ合つて——これが大事なのです——そうしてはつきりと、有^う耶^や無^む耶^やでなく納得し合うというのは、ちつとも遠慮しなくていいのではないのでしょうか、首をすくめてばかりいないでね。わたしならまだあつたんですがね、ぶつつける原則が。と言って、付け焼刃では刃こぼれしますしね。

何を言いはじめたのでしたか、ああ、そうだ、同文同種の御利益^{ごりやく}を言いかけていたのでしたね。その御利益のことですが、薬だつて一つで万病にというわけには行かないでしょう。同文同種だつて、そうです。時どき不便も起きます。中毒を起こすこともあれば、とんだお笑いになることも大ありで、同文同種だからといって、やはり用心は欠かせませんね。そう言えば、わたしにも一つ、その同文のとんだお笑いの口があるのですが、幸いでしたね、人前に出ない、自分の心の中だけですんでしまったことなので、自分が自分を嘲^{あざけ}っただけで、助かりました。どんなことかと言うと、いや、はずかしいから、それはあとまわしにして、少しほかのおしゃべりからさせていただきますしょう。

中日戦がはじまつたところのお話です。日本では「勝った勝った」で、軍隊も民間人も「華北い

よいか住みよいか」というところでしよう、船と汽車とでどんどん送り込まれ、華北の都市の人口はふえる一方、地図で見るとチップケな国なのに、よくもこんなにまあ、人がいるもんだと思わせましたね。

人が集まれば紙幣きづが舞う。まことに神秘的なものです。もともと戦争というのが、浪費の中では一番の親玉でしょう。だからその、戦争景気と言うんですか、現地はただもう、その活気の中で煮え立っていました。

そうになると、付きものはなんと言っても、まず水商売。日本人の水商売の人たちが、その甘しる、人にばかり吸わしてなるかと、ワンサとなだれ込んできました。こうなると、見る目には順が逆になってしまつて、まるで世の中の景気は、始まったのがここではなかったかと思わせるようにも、なつてしまいました。日暮れ時ともなると、制服の軍人や軍属やら、国防服とかいうのを着た民間人やら、そうかと思うと中国便衣の下には拳銃を隠しているぞと見せ誇る——隠しているぞと人に知らせたい心理というのは、妙なものですね——そういう格好の特務機関員やら、ずいぶんと金も落ちたと思います。千客万来の賑わいぶりでした。

さて、所は北京、ある日本人経営のバーでのことです。

わたしの後輩に趙というのがしまして、これがなかなかいかす男で、態度はものやわらかいし、

美男で、北京の西方に、小さいながら炭鉱を所有していて、そのほうのみいり、金に困らないところから、北京に出るとは夜な夜な、赤い燈青い燈だったらしいのです。それが、物めずらしさから立ち寄ったそのバーの女と仲よくなってしまつて——もちろん、日本女性です——つまりはまり込んでしまつて、熱心に通うようになっていたのです。

氣持がわからないではありませんよ。なにしろ、ねだられば、そのねだりが正真正銘そのものズバリで、はっきりわかり過ぎるし、機嫌を損ねたら口舌（言い争い）にいちいち明答しなければならぬ、要するに白ばくれのきかない、同文同種の度の過ぎる中国女性よりも、その点、曖昧模糊としてやりとりのすませる異国女のほうが、どれほどか氣安くもあつたでしょう。おわかりいただけますね。

その趙が、しばらく姿を見せないなと思つてるところへ、ひょっこりとやつて来るなり、「近ごろどうも、軍人の後押しのある日本人が乗り込んで来て、土地の鉱権を荒らしてまわるんで、みんな困つてます。何か方法がないものでしょうか？」

と言うのです。わたしが多少、日本の軍人ときあいのあることを勘定に入れて、うまく口ききに使おうというつもりなのです。ところが、軍人というものは、相談ばなしとなりますと、事ごらの大きい小さいではないのです、件数が物を言います。作戦のほうの軍人さんには厳正な人が